
ままならぬママのまあまあな話（仮題）

ごはんライス

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ままならぬママのまあまな話（仮題）

【コード】

N3839BA

【作者名】

ごほんライス

【あらすじ】

2000字設定にしましたが、5字オーバーしてしまいました。ごめんなさい。腰が痛い。

失恋した朝。勃○もしてない。虚しいことである。じじいか。

松崎パイ壱は、目をこすりながら学校に向かう。失恋したって学生の義務は果たさないといけない。虚しいことである。さぼって寿司屋に行きたいが、カネがない。学生は貧乏である。月収がわずかに五千円だ。派遣より酷い。

「パイちゃん。おはよう」

金村カネ子だ。こいつはオレをふった張本人だ。

「あれ。何か怒ってるね」

カネ子がパイ壱の脇をくすぐった。「うひ。うひ。うひ。うひひひひひ」

「なに怒ってんのよう。ひよっとして昨日ふったことを怒ってるの何だ。わかってんじゃないか。ならば話は早い、とパイ壱は思う。

「ぶっ殺すぞ。包丁で刺すぞ」

「包丁なんてどこにあるの」

「ここにある」

パイ壱はいつの間にか包丁を握っている。

「えー！ おかしいよそれは」

「おかしくない。これは小説だ。現実じゃない」

「んもう。リアリティのない小説は売れないよ」

「やかましい」

パイ壱はカネ子を追い掛け回した。

「はあはあはあ。しつこい。パイちゃんのやつ、陰湿だわ」

「カネ子こらー待ちやがれー」

バカなことしてるから二人は遅刻した。廊下に立たされた。バケツを持つてる。

「パイちゃんのせいだよ。くすん。重い」

「ふん。自業自得だろうがよ。ふるのが悪いのさ。失恋てのは辛い

んだよ」

「パイちゃんがやせればオツケーしたのに」

「本当に？」

「本当よ。あたし、メタボリック嫌いなんだもの。性格は何でもいいけど」

パイキはジョギングを始めた。

朝からがんばる。

「はあはあはあ。疲れたな。ちょっと自販機で自販機でコーラを買ってる。水にしるよ！！」

「ごくごくごく。コーラうめえなあ」

これじゃあやせるわけがない。愚かな男だ。女と付き合うのは無理だなバカめ。

案の定、パイキは高校を卒業し正社員にはなれなかった。アルバイトになった。そういう運命なのか。

パイキは工場での作業が辛くて辛くて屁が出そうだ。毎日毎日同じ単調な作業を何時間もやらされる。気が狂いそうだ。

パイキは包丁を握りしめ、街をさまよった。当たり前のことであるが、警官に捕まった。

「おまわりさん。離してください」

「お前、いいおっぱいしてるじゃねえか。もませるよ。ぐっふふふふふ」

「いやー！ー！ー！ー！！」

パイキは泣きたい。神も仏もないのか。こんな愚かな話があつていいのか。いいわけがない。いいわけがないよ。

パイキは警官の股間を蹴り上げた。「うぎゃあああああああ走り出した。

ゆく当てなどない。とにかくカネがない。

カラオケボックスにもいけないし、寿司屋にもいけない。アルバイトは低賃金である。ろくなことない。

パイキは気付いたら浜辺にいた。海を眺めていた。

「海のばかやるー！ー！ー！！！」

すると、海からざざざざざんと、巨大なタコが現れた。パイ壱の方へ近寄ってきた。「青年。悩みがあるようじゃな」「生意気な口を叩くな」「むか。わしは長老じゃぞ。タコの長老じゃぞ。人間風情がなめた口たたくんじやない」「それは失礼しました」

巨大なタコは、パイ壱にいいものを差し出した。

「これは一体なんですか」

「これはよくあるやつじゃ。恋の弓矢じゃ。この弓で射って、好きな子に矢を当てるとその子がお前のことを好きになってしまっんじや」

「こんないものをもらってお礼のしようが」

「なあに。お前いいおっぱいしてるからもませてくれ」

「いやだー！！」

パイ壱はマシンガンでタコをばばばばばと撃った。「うぎゃ。うぎゃ。むぎゃああああああ」即死だった。

「ようし。これさえあればセツ〇スし放題だ。いいぞ」

パイ壱は早速、好きな子のところ、つまりは、カネ子のところに向かった。

カネ子は大学に入って今一人暮らしをしている。

「ここだな。カネ子のアパートは」

ぴんぽーん。

「あら。パイちゃん。久しぶりね」

「あは。相変わらずきれいだね」

「相変わらずメタボリックだね」

「やかましい」

パイ壱は思った。恋の弓矢があれば、もつときれいな子をゲットできるんじゃないか。カネ子は美人だけど美人の中では二流だ。

「まさか、あたしに告白しに来たんじやないでしょうね。だめよ。

あたしには彼氏が」

「いやいいよ。さっきまでその予定だったけど、予定変更だ。んじ

「や！」

パイ壱はUターンした。「あ。ちょっと待ってよ。パイちゃん。なによ。それ。聞いてないよ」

カネ子は急いで台本をめくる。「台本では恋の弓矢であたしとパイちゃんが恋人同士になるってことになってるのにあのバカ、欲望に負けて暴走しとる」

パイ壱は走った。走って走った。テレビ局に向かってる。テレビ局には美人がいっぱいいる。

テレビ局の入り口で番犬にかみつかれた。怪しいやつだと思われたか。無理もない。弓矢を持つてる。「くそ。入れてくれよ」「しつこいとまたかみつくぞ。いいのか。バウ！」「ひい！」

パイ壱は体育座りをし、顔を膝に乗せてしくしく泣いた。

「世の中そんなに上手くないよ」

カネ子が優しくパイ壱の背中をさすった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3839ba/>

ままならぬママのまあまあな話（仮題）

2012年1月9日23時49分発行